

## Contents

- 図書館を一人でも多くの  
学生に使ってもらうために ..... P2
- 資料検索<社会学系編> ..... P4
- 私が薦めるこの一冊 ..... P6
- 新稀観書紹介<その4> ..... P7
- 統計データで見る松山大学図書館 ..... P8



## 図書館を一人でも多くの学生に使ってもらうために…

経済学部助教授 渡辺 孝次

まずはじめに、僕の経験談から始めます。数年前のゼミの風景。

僕：それでA君、きみは卒論、何について書くんか？

A：サッカーで行きたいんです。

僕：おう、そうか。サッカーの歴史か？

A：そこまで本格的じゃなくて、まあJリーグを中心に。

僕：Jリーグの経済効果とか、そんなことか？

A：そうムツカシイことじゃなくて、誰がどうしたって、プレーヤー中心に。

僕：プレーヤー中心じゃあ、スポーツ雑誌じゃないか。もう少しこう、大きい問題とできるだけ関係づけてだねー、ちょっと本調べてみるか…。おい、こんな本が図書館にあるぞ！知ってたか？知らん？まあいい、そんならさっそく借りてだなー、論文の骨組みをだなー…。

A：あの一、図書館の本を借りたことないんすけど、どうするんです？

僕：なんじゃー?! だって君、4年生で、今まで1冊もか？

A：(少しは悪びれた様子アリで)ハイ。

僕：(ア然)、その一、身分証明書でだなー、すぐ借りられるんだゾ。

A：そうなんすか…。知らなかった…。

こういう事態は、やっぱりなくさなきゃいけない。図書館の使い方くらい、1年生で知ってなきゃダメ。これが経済学部1年生の基礎演習に図書館実習を取り入れた、スタート地点の風景です。

### <問題点・反省点>

① 大教室でできるので、ビデオ上映自体に問題はありませんでした。面白いかというイメージ。図書館側では、目下作り直す準備をしているようですが、これはぜひ実現してほしいと思います。できれば、優等生が「私知ってるのよー」って感じで自慢げに紹介するスタイルではなく、まったくズブの素人の学生が、右往左往しながら、学友の笑いを買いながらもなんとか全体像を把握する、なんてスタイルがいいんですが…。

教員もしくは職員が館内をツアーで紹介するのも、普段は立入禁止の閉架が見られるので、興味ある学生には面白いでしょう。しかし、あくびしている学生もいます。また閉架では、本を勝手に抜き取らないよう厳重な注意が必要です。それで今年は、閉架見学は中止しました。代わ

この試みも、足かけ4年目となり、いろいろな意味で充実してきました。といっても、学部のすべての1年生に行き渡っているかという面になると、まだまだ改善の余地が多いと言わざるを得ませんが…。4年間の蓄積から言えることをまとめておきます。

まず最低でも次のことは、という意味で下記の3つを考えましたが、これは今でも正しいと考えています。

- ① 図書館全体の構造と役割について、おおざっぱな知識がある。1Fで調べものができるとか、新聞・雑誌が見られるとか、3Fに文学があるとか、4Fに指定図書コーナーや、資格・公務員試験・留学関係コーナーがあるとか。それを知らせる。
- ② 開架書庫について、だいたいどの辺にどんな本があるか知っている。つまり、漠然とテーマがイメージとしてある場合に、それに関する本を、関連する書架の前に行きついでに手にとってパラパラ見ることができる。さらに、分類番号が分かっていたら、さっとその本の在りかに行ける。
- ③ 講義などで、先生が参考文献を告げたような場合、「面白いかも」と言ってその本を借りられる。つまり、OPAC上で、書名から分類番号を検索することができる。

そのために、①図書館の作成したビデオ上映を含める館内ツアーの日、②開架実習の日、③文献検索の日、という3つを設けました。

りに、参考図書の使いこなしを、クイズ形式で学生のグループ同士を競わせるような形で、つまりゲーム感覚でねらう方が学生には面白いだろうと考えて、試みました。例を挙げると、「松山とロサンゼルスはどちらが北か？ マルクスの生没年は？ インドネシアと日本、どちらが人口が多い？ <リストラ>ってどういう意味？」などを書いたメモを渡して、地図や人名辞典等で調べさせました。

★教訓1:学生に特定の記事の載っている雑誌のバックナンバーを調べさせたとこ、「その号はありません」。飾ってある棚の奥に入っていることを知らない!

② 学生に分類番号だけ書かれたメモを渡し、開架からその本を取って来させる実習は、おおむね興味を引いているようです。が、リストに似た傾向の本がズラっと並んで

いと、在りかも隣どおしで簡単すぎます。できるだけバラけさせるのが結構大変。

★**教訓2:**学生に7冊分の番号を渡し、取ってこいと指示したところ、2~3冊しか取ってこれない学生が続出。貸出中にしても多すぎだと確認に行くと、本当でない! 何と、開架と閉架の区別をしないで課題を出してしまっていました! 閉架の本は当然見つからないわけです。僕のミス(というか、他の人にも起こったようなので、これはリストの問題)。

③ 当然のことですが、最低限のPC操作ができなければOPAC検索はできません! ですから、パソコン演習は絶対に前期にやってもらう必要があります。さいわい経済学部に関しては、これは半永久的に確保できそうです。また、ここ数年悩まされているのが、50人がいっぺんに検索するとサーバーがダウンしてしまうこと。容量増強の面は、多少は改善されましたが、まだまだ少なすぎると思います。

とはいえ、100回線にしろと要求するのもムリな話です。ですから、検索実習時の工夫は今後も必要でしょう(つまり、パソコン室に4ゼミくらいを入れて、合同で「じゃあやってみよう」とやるのはムリです)。

またここでも、②と同様、調べさせる文献を事前にソートしておくことが求められます。現在は、前年度に図書館に入れた本の入庫リストを出してもらっていますが、これをそのまま利用することには問題があります。来年からは、リストをエクセル文書として事前に出してもらい、ふさわしくないもの(全集ものなど)を事前に抜くなどの下準備が必要でしょう。検索自体は、ほとんどの学生が問題なくこなしています。ただ、勝手に休む学生は困りもの。対策にいつも悩まされています。できれば、検索の仕方についても、図書館側でビデオを作成してもらえればありがたいと思います。

## 図書館見学実施状況

	学部学科	経 済	経 営	英語英米文	社 会	法	合 計
1997年度	演習数	14	15	6	8	19	62
	人 数	288	244	77	81	325	1,015
	1年次演習実施率	54.5%	40.0%	85.7%	66.7%	90.9%	58.5%
1998年度	演習数	22	15	5	8	15	65
	人 数	534	191	96	86	347	1,254
	1年次演習実施率	100%	40.0%	83.3%	61.5%	84.6%	66.7%
1999年度	演習数	29	23	6	7	14	79
	人 数	455	335	87	83	243	1,203
	1年次演習実施率	100%	54.5%	85.7%	58.3%	91.7%	76.3%
2000年度	演習数	21	20	4	12	18	75
	人 数	439	293	119	164	263	1,278
	1年次演習実施率	80.8%	60.6%	80.0%	100%	84.6%	76.4%

※ただし、2000年度は9月末日現在

※演習数は1年次から4年次までの総数

1年次演習実施率は(実施演習数÷演習総数)により算出

※学部学科全体で見学を行った場合は100%とした。

## 資料検索<社会学系編>

人文学部助教授 大内 裕和

### 1. 社会学への導入のために

ここでは主に社会学系の学生を対象に、社会学を学習する際の資料検索の基本について紹介しましょう。大学生にとって基本的な情報源といえまず新聞です。定評ある新聞には比較的信頼度の高い情報がバランス良く提示されています。日々の社会現象に関心をもち、その知識があることが社会学の勉強をする上で必要不可欠です。大学の四年間を通して、**一紙は必ず購読しましょう**。間違っても携帯電話代のために新聞代をケチることなどないように。一紙を購読するだけでなく、他の新聞と比較することも重要です。一見似たように見える各新聞も注意深く読むと大きな違いがあることがわかります。最大の部数で影響力の大きい朝日新聞と読売新聞が現在の日本国憲法について全く異なった見方をしているということなどは、日本社会に生きる市民にとってなくてはならない常識の一つでしょう。国内・国外の主要新聞は松山大学図書館一階の**新聞コーナー**で読むことができます。



さらにインターネットでも主要新聞社の記事を見ることが可能です。各新聞社のサイトは充実してきています。**朝日新聞社のホームページ** (<http://www.asahi.com/>) や **毎日新聞のホームページ** (<http://www.mainichi.co.jp/>) などは絶えず更新がなされ、最新情報が載っています。私も授業直前にアクセスしてデータとして役立てることも多いです。どちらも松山大学図書館のホームページからのリンクで入ることができます。また同様に1985年以降の記事から当日の朝刊に掲載された記事までが検索できる**朝日新聞記事全文検索**も利用できます。これもレポートなどを書く際に基本的な情報を得るのにとても便利です。

### 2. 本格的な社会学の学習のために

さて適切な導入を行ったら、社会学の専門へと入っていくことになります。初めに「何を読むか」というのが大切な問題となります。社会学のブックガイドとしては、今年社会学概説のテキストにもなっている野村一夫『**社会学感覚**』(文化書房博文社)が実に幅広く文献を紹介しています。また私が執筆に参加している『**学問がわかる500冊**』(朝日新聞社)も社会学やその関連領域である哲学、教育学、社会福祉学の重要・基本図書が解説付きで紹介されています。この2冊はぜひ手元に置いておくと良いでしょう。



「学問がわかる500冊」  
 朝日新聞社、2000年  
 分類番号：019/G4/1  
 配架場所：開架(2階)

さらに詳しいレベルでは『**社会学文献事典**』(弘文堂)があります。これは社会学の過去から現在にいたる定評ある専門書について、その多くを執筆者あるいは翻訳者自身が解説するというユニークなもので、内容的にとっても充実しています。この事典で必要な文献を探したり、概略をつかんでからその専門書を読んでいくのも良いでしょう。専門の勉強をする際には文献を探すと同時に専門用語の意味を知るための辞典が重要となりますが、新しく信頼度の高いものとしては社会学では『**新社会学辞典**』(有斐閣)、教育社会学では『**新教育社会学辞典**』(東洋館出版社)があります。これらの辞典の用語解説から文献資料にたどり着くこともできます。また1999年に刊行された『**福祉社会事典**』(弘文堂)は、21世紀における高齢化社会の到来を意識した事典ですが、狭い意味での「福祉」ではなく、「福祉社会」として現代社会を捉える視点で構成されています。巻末の年表式文献リストも充実しています。これらの事典・辞典類はいずれも大部で学生にとっては高価ですが、



図書館で利用することが可能です。学生が自分で購入するものとしては、今村仁司編『現代思想を読む事典』（講談社現代新書）が安価で特に薦められます。



「新社会学辞典」  
森岡清美、有斐閣、1993年  
分類番号：361.03/\$403/1  
配架場所：開架(1階)・  
参考図書コーナー

「社会学文献事典」  
見田宗介、弘文堂、1998年  
分類番号：361.03/\$510/1  
配架場所：開架(1階)・  
参考図書コーナー

「新教育社会学辞典」  
日本教育社会学会、東洋館出版社、  
1986年  
分類番号：371.3033/K21/1(2)  
配架場所：開架(1階)・  
参考図書コーナー

もう1つ資料検索で重要なのは年表類でしょう。興味深く社会学の勉強にも役立つ年表としては下川耿史&家庭総合研究会編『明治・大正家庭史年表』、『昭和・平成家庭史年表』（河出書房新社）の2冊があります。中学校や高等学校の歴史の授業では教わることの少ない市井の人々の日常を知ることができます。歴史研究における社会史や民衆史の発展、さらには現在のカルチュラル・スタディーズの隆盛といった新たな学問の趨勢は、人々の生活や大衆文化への関心を高めています。この年表はそれらへの格好の入口となることでしょう。少しページをめくってみると、1888(明治21)年、神奈川県が海水浴場に男女の区分を設置、1923(大正12)年、丸ビル完成、初の“美容院”も誕生、1964(昭和39)年、幼稚園申し込みに二日徹夜という過熱ぶり、など興味深い事実が満載されています。

個別領域のデータについては各専門の先生に聞いてほしいのですが、ここでは最近研究の著しい発展が見られる女性学、ジェンダー・スタディーズについて見てみましょう。ジェンダーは現在、社会を読み解くキー概念となっています。それについて学習する際、井上輝子・江原由美子編『女性のデータブック』（有斐閣）はとてとも有用です。女性に



「女性のデータブック」  
井上輝子・江原由美子、有斐閣、  
1999年  
分類番号：367.21/112/2(3)  
配架場所：開架(2階)ほか

関するデータが広範囲に渡って紹介され、それぞれに的確な解説がつけられています。またフェミニズムの専門用語に関してはリサ・タトル『フェミニズム事典』（明石書店）があります。それぞれの言葉の解説を通して、これまでの学問にどれだけ＜男性中心主義＞のバイアスがかかっていたのかを理解することができます。

### 3. インターネットの社会学専門サイトについて

さらに最近ではインターネットによる情報検索も充実してきています。ただこの領域は変化が激しく、ここで書いた情報がすぐに陳腐化してしまう可能性があるため、詳しいことについては各専門の先生に尋ねてください。定評のあるもののみ挙げておきましょう。社会学の基本サイトとしては、ブックガイドでも挙げた野村一夫氏の作成による **Socius**(<http://socius.org/>)があります。参考文献の提示から社会学の学習方法まで幅広い情報提供を行っています。関連サイトとのリンクも充実していて、まずこれを十分活用することを薦めます。次にやや専門的になりますが、**法政大学大原社会問題研究所** (<http://oisr.org>) があります。関連リンクが充実しており、また「労働関係文献データベース」は膨大な文献を論文単位で検索することが可能です。「リストラ＝失業者の増大」など、新自由主義(市場独裁主義)の進展のなか深刻化する労働問題に関心のある人はぜひアクセスしてみてください。近年は市民運動のネットワーク化も進んで来ています。東海村JCO臨界事故以後、世界的に大きな注目を集めた**原子力資料情報室** (<http://cnic.jca.apc.org/>) や2000年12月に日本軍性奴隷制(従軍慰安婦制度)を裁く「女性国際戦犯法廷」を東京で開くVAWW-NET Japan、正式名称「**戦争と女性への暴力**」**日本ネットワーク** (<http://www.jca.apc.org/vaww-net-japan/>) などがあります。これらのサイトから新たな社会へ向けての胎動を感じることができるといえるでしょう。他にも自分の関心にあったサイトを探してみてください。

最後に一言、松山大学図書館は文献・資料ともに大変充実しています。社会学科の学部学生が日常的に学習を行ったり、卒業論文を書く際に困るということはないはず。職員の皆さんも様々な工夫を行って、学生の積極的な利用に備えています。学生利用促進へ向けての開架図書のみならずの充実も現在進行中です。ぜひこの図書館を十分利用して、自分の勉強に活かしてください。

## 私が薦めるこの一冊

法学部助教授 神例 康博



臓器移植法施行後初の脳死患者からの臓器摘出手術が高知赤十字病院で行われて、はや1年半の時間が流れた。本書は、この脳死移植第一例の渦中においてその混乱を経験した記者たちの貴重な取材報告である。

この移植手術をめぐるのは、過剰ともいえる「死を待つ報道」が大きな問題として取り上げられた。本書でも、この「死を待つ報道」に係わった記者たちの苦悩が語られている。しかし、真に問われるべきは、「死を待つ報道」それ自体ではなく、本書も指摘するように、

### 脳死移植 いまこそ考えるべきこと

高知新聞社会部「脳死移植」取材班著、河出書房新社、2000年

分類番号：490.154/K49/1

配架場所：開架(2階)

脳死移植が本質的に「死を待つ医療」であるという点であろう。「『脳死』下での移植医療は、心臓以外の臓器も含めて、本質的に『死を待つ医療』である。その本質ゆえに、移植の準備は必ず、臓器提供側の患者が亡くなる前から動き出す。……家族が生への望みをまだ失ってはいない時期に、『移植』の話、準備は動き始めるのである。」(本書130頁)。

私は常々、脳死移植を考えるうえでもっとも警戒しなければならないのは、「人間愛」という観点からの臓器提供讃美論であると考えている。大切なことは、脳死移植が「死を待つ医療」であることをしっかりと見据えたうえで脳死移植の「暗」の側面をじっくりと議論することだと思う。その意味で、本書に込められた記者たちの自己批判に真摯に耳を傾けることが、「脳死」問題を考える第一歩といえるだろう。

経済学部講師 上田 雅弘



これまで経済理論のテキストにおける「企業」の扱いは、労働・資本などの生産要素を投入すると、それに対応する生産物を産出するという、単なる技術体系とされてきた。しかし「企業」は、日々の市場取引と企業内の革新を通じて組織を再編成する、いわば有機的な存在なのである。

このような視点から「企業経済学」では、企業はなぜ存在するのか、またどのように行動するのか、そしてどのように組織されているのかという問題が取り上げられ、経済理論の紹介と現実企業の分析が実にバランスよく織り交ぜられている。

### 企業経済学

小田切宏之著、東洋経済新報社、2000年

分類番号：335/0272/2

配架場所：開架(2階)ほか

はじめに、「企業」を知る手がかりとして財務諸表の見方が説明されている。これは企業データを用いた様々な分析を行う際に知っておきたい基本である。財務諸表をサーフィンしながら企業活動に馴染みを持ったところで、企業の本質、つまり企業の目的に関する理論的なアプローチが紹介される。さらに分析の視点はコーポレート・ガバナンスの問題、日本的雇用慣行の意義と限界、企業の組織再編成など、現在日本企業が抱えている様々な問題へと拡張される。

企業の行動を理論的に捉え、現実のデータやトピックを使って企業行動を分析するという意味では、本書は経営戦略論、経営組織論、財務論などの経営学の諸分野と、経済学的な考え方や分析方法を用いたアプローチの架け橋となる包括的なテキストであるといえよう。

## 新稀観書紹介<その4>

経済学部助教授 松井 名津

### 貧困問題コレクション 1724-1870

稀観書室でこのコレクションが人目を引くことはまずない。装丁はお世辞にも美しいとはいえず、著名な作家や思想家の名前が冠されてもいない。パンフレット類は粗末な背表紙がつけられているだけ、薄汚れた雰囲気を漂わせている。たとえ暇つぶしにせよこんなコレクションを手にとってみようとは思わないだろう。図書館の一角で静かに朽ちていくだけの存在のように見える。しかしこのコレクションの中身は朽ち果てたものではない。

今の私たちを取り巻く問題。そのなかでも「ばらまき型福祉を反省」「介護保険導入を巡って現場で混乱」といった言葉。新聞の見出しを飾り、ニュース番組のヘッドラインとなるようなこうした言葉は、今までの福祉国家システムが問われていることを示している。このコレクションが対象としている時期もまた、貧困問題the Poorとして現れた福祉を巡る諸問題が問われた時期であった。

当時、貧困者の状況に関するレポートが相次いで公開されたが、その内のいくつかがこのコレクションにも収められている。一読すれば、当時最先進の国、文明国といったイギリスのイメージが覆ることだろう。こうした諸問題（失業問題だけでなく、公衆衛生や教育もその中に入っている）に従来型システムは充分対応していないというのがおおかたの論調だっ

た。納税者の負担増、それにもかかわらず問題解決の糸口は見えない、給付金目当ての不心得者すらいる。地方行政担当者のお粗末さ、汚職。中央政府による規律の導入と地方自治。今も聞いたことのあるような話が飛び出してくる。

そして従来型システムを改変しようとする動き。これはこのコレクションの中に収められているチャドウィック報告書に結実し、1834年新救貧法が成立する。原則として、労働者の自助努力をうたい、救貧の対象となる労働者の処遇が就労している労働者の最低の状況を上回ってはならない「劣等処遇」、男女別のワークハウス収容等々。その内容はいったいこれのどこが「救貧」なのかといいたいくなる。しかしまたこの法律は国民が国家によって救済される権利を持つことを、不十分とは言え謳ったものでもあった。

とはいえ法律に魂を入れるのは現場である。介護保険がそうであった以上に、新救貧法を巡っても現場は混乱し、その運営、真に労働者を救済しているのか等々が問われていった。そうしたレポートがコレクションの後半を占めている。

稀観書室のなかでこのコレクションは、その中に当時の貧困にあえぐ人々の苦渋とその対策に苦心する官僚の誠実さ、同時に今だからこそ見えるその論理の欺瞞を宿して静かにたたずんでいるのである。



## ——統計データで見る松山大学図書館——

### 図書館利用状況推移表

	入館者数	貸出冊数	閲覧冊数		
			開架	閉架	小計
1995年度	153,562	23,107	56,506	8,393	64,899
1996年度	180,936	27,492	60,997	10,487	71,484
1997年度	188,676	35,736	77,554	12,774	90,328
1998年度	222,733	44,273	85,839	13,416	99,255
1999年度	217,672	47,807	82,681	11,458	94,139
2000年度	120,482	23,084	37,951	5,717	43,668

※ただし、2000年度は9月末日現在

### 『相互協力』利用件数推移表

	本学からの申込み件数			他館からの受付け件数			合計
	文献複写	相互貸借	所蔵調査	文献複写	相互貸借	所蔵調査	
1995年度	296 〔36〕	144 〔39〕	86	133 〔3〕	5 〔0〕	10	674
1996年度	380 〔53〕	226 〔59〕	107	99 〔4〕	6 〔0〕	21	839
1997年度	403 〔60〕	277 〔56〕	73	83 〔10〕	7 〔0〕	22	865
1998年度	587 〔52〕	321 〔69〕	50	124 〔15〕	12 〔0〕	20	1,114
1999年度	338 〔43〕	175 〔23〕	25	242 〔15〕	2 〔0〕	10	792
2000年度	135 〔17〕	85 〔13〕	1	240 〔17〕	11 〔1〕	7	479

※ただし、2000年度は9月末日現在

※〔〕内は謝絶の件数

1999年9月よりNACSIS-ILLを開始した。

### 「編集後記」

この夏、プラハのストラホフ修道院図書館を見学した時、その壮麗さに圧倒されました。「哲学の間」と「神学の間」が廊下で繋がっていて、写本やインキュナブラ（初期刊本）が展示されていました。図書室になっている二つの「間」は、天井に描かれたフレスコ画が美しく、書架に配架されている稀覯書を含めて、図書館の世界遺産と言っても過言ではない内容でした。

デジタル化が進む図書館界のなかで、中世がそのまま再現されているストラホフ図書館は、本や図書館の存在の原点を示しているように感じられました。書物に込められた著者や、筆写をした人々の思いが伝わってくるようです。

グーテンベルクによる印刷術の発明は、本の歴史を一変させましたが、現在、進行しつつあるIT革命は、本の形式そのものを変容させてしまうかも知れません。本と図書館の未来は、どうなっていくのか。図書館の現場では、書物が担ってきた過去を引き継ぎながら、日々、利用者サービスを第一に考え、図書と情報を等価なものとして捉え利用者への提供を心がけています。

この「図書館報 熟田津」は、新しい情報を提供すると同時に、稀覯書紹介などをおして、図書の資料的価値の重要性も認識していただきたいと思います。編集しています。

松山大学図書館報 No.26 2000年11月1日発行

編集・発行 松山大学図書館

〒790-8578 松山市文京町4番地2 TEL (089) 925-7111 (代)

ホームページアドレス <http://www.matsuyama-u.ac.jp>

E-mail: [w-lib@cc.matsuyama-u.ac.jp](mailto:w-lib@cc.matsuyama-u.ac.jp)